

領域代表あいさつ

長谷 あきら（京都大学大学院理学研究科）

早いもので、年2回のニュースレターも第5号を発行することとなりました。代表として、領域運営にもだいぶ慣れてきた気がしておりますが、ここで気を緩めること無く、領域の目標達成に向けて力を尽くしていきたいと思っております。ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、本年度は領域3年目ということで、中間評価を受けることとなりました。評価資料の作成などで皆様に多大な協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。幸い、新技術開発の進捗や活発な共同研究などが評価され、A（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる）判定を受けることができました。ここにお礼申し上げます。詳しい所見については、文科省ホームページ（http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/chukan-jigohyouka/1327387.htm）を参照ください。以下、評価資料やヒアリングの準備する機会に感じたこと、また、所見にあった指摘事項への対応などについて少し述べさせていただきます。

研究内容についていえば、A03班の活動を中心として、新技術の開発にある程度の目途がついたことを嬉しく思います。計画研究では、「単一細胞遺伝子発現解析技術」、「質量顕微鏡技術（Imaging-MS）」「フェムト秒レーザー技術」について、植物を材料とした実験結果が出始めております。また、公募研究班の方々からも、いろいろな技術を提供していただきました。今後は、班会議、技術ワークショップなどの活動を通じて情報を発信し、これらの技術の応用を広く模索し、具体的成果につなげていきたいと思っております。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

また、評価資料を用意するにあたり、班員間の共同研究の数を数えさせていただきました。下の図にもありますように、様々な共同研究が進行中であり、その数は100を超えています。これこそが領域の力と思い、大変うれしく感じております。私自身、もっぱら光応答の研究を進めてきましたが、他の分野の動向に、知らず知らずのうちに疎くなっていたような気がします。領域の活動を通じ、技術面のみならず、研究上のアイディアについても、いろいろなものを得ることができました。班員の皆様も、ぜひこの機会を生かして、研究の幅を広げていただけたらと思います。

中間評価の所見のなかには、領域の運営についていくつかのコメントがありました。大きなものからいえば、「最終出口（産業応用）を意識する必要がある」との指摘がありました。確かに、この点について、本領域の活動に弱いところがあったかと思っております。来年度からは、この点についても何らかの方策を講じていきたいと思っております。また、領域外（研究者および一般国民）への情報発信が弱いという指摘もありましたので、総括班を中心に、時期を測りつつ、具体的な企画を立てていきたいと思っております。

最後に、研究の後半を迎えるにあたり、領域が目的である「新しい植物環境感覚像」の構築へ向けて、研究の収斂を図る必要性を感じております。これまでの活動を通じて「新しい植物環境感覚像」が垣間見えてきた、という手応えは大いに感じておりますが、これを具体化するにはまだまだ努力が必要です。今後は、班会議や分科会・シンポジウムなどの活動を通じ、「新技術で得た知見の整理」、「細胞レベルで見直した刺激応答」、「刺激横断的な環境感覚像」などをキーワードに、領域としての研究活動をまとめていきたいと思っております。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

